

ハイデルベルク信仰問答より

問 113 第十戒では、何が要求されていますか。

答え それは、神のどの戒めにも背いている、最も小さな性癖や思いさえも、私の心には決して入りこませるべきではなく、むしろ、私たちは常に心を尽くして罪を憎み、すべての正義に満足を見出し、それを喜ぶべきであるということであります。

〔別訳〕

神の戒めのどれか一つにでも逆らうようなほんのささいな欲望や思いも、もはや決してわたしたちの心に入り込ませないようにするという。かえって、わたしたちが、あらゆる罪には心から絶えず敵対し、あらゆる義を慕い求めるようになる、ということです。

第十戒 隣人の家を欲してはならない。隣人の妻、男女の奴隷、牛とろばなど、隣人のものを一切欲してはならない。(出 20:17)

第十の教えは「食りの禁止」です。問 113～115 にかけてこの教えの解説がなされていますが、教えそのもの(出 20:17) 自体が比較的長い文章になっています。「食り」というものが十戒のそれぞれの戒めで禁じられている行為に門を開く根本的なものであるために、最後の戒めとして釘刺されているのでしょう。

ここでは隣人のものを欲しがることが禁じられていますが、律法が与えられた時代に人々が所有していた代表的なものとして「家」「妻」「男女の奴隷」「牛とろば」が挙げられているわけです。これらは、時代や地域によってより広く適用される可能性があるでしょう。

まず、なぜ「隣人の家」を欲しがってはならないのでしょうか。保有している資産の大小によって、人が住む家の大きさも異なります。しかし、中には多くの財産を持っていてもそれを見せないようにしている人もいます。問題の本質は、自分よりも良いものを持っている人を羨ましく思う思考そのもの、自分に与えられているもので満足できない心の状態にあるでしょう。自分の持ち物が神から来ているという真理を忘れるとき、人の心からは止め処もなく不満が出始めます。「もっと欲しい」という欲求は、底なし沼のように人の心の空洞を広げ続けます。

次に「妻」が挙げられていますが、他人の配偶者に思いを寄せること、実際に奪うことが禁じられています。これも本質的には、自分の配偶者だけで満足しない心の欲求を表していますが、当時は一夫多妻が認められていただけに問題はより複雑でした。資産のある人は、複数の

妻、複数の側女を持っていたからです。一夫一婦制において「他人の妻を奪う」のとは感覚の違いがあったと思われませんが、いずれにせよ他人のものを欲しがるところには人間間のトラブルが発生するだけでなく、その人に配偶者を与えられた神を軽んずることにつながります。

「男女の奴隷」も、当時裕福だった人々が所有していた財産の一部と考えられていましたが、良い仕事をする奴隷や容姿端麗な奴隷を欲しがることがあったのでしょう。

「牛とろば」も重要な労働力でありましたから、人目を盗んで奪い取る者や安値で買い叩く者があったと思われまます。

他人のものを欲しがるとは、これらに留まらず、能力、家柄、学歴、業績、容姿など、あらゆる分野に及びます。いずれにせよ、他人が持っている自分が持っていないものを羨む心、神から与えられたものに満足しない心が問題とされているのです。「神と自分」という縦の関係が見えなくなると、人は「他人と自分」という横の関係を相対的に見始める傾向があります。

一方、何かを手に入れるために努力をすることが禁じられているのではなく、自分を磨いて賜物を増し加え神と人のために用いていくことは聖書でむしろ推奨されています。

最後に本問答書が補足している内容を見ておきましょう。

① 神のどの戒めにも背いている、最も小さな性癖や思いさえも、私の心には決して入りこませるべきではなく

これまで第一～九戒の中で教えられてきたことを振り返ってみましょう。

第一戒：あなたには、私をおいてほかに神々があってはならない。(出 20:3)

第二戒：あなたは自分のために彫像を造ってはならない。(出 20:4)

第三戒：あなたは、あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。(出 20:7)

第四戒：安息日を覚えて、これを聖別しなさい。(出 20:8)

第五戒：あなたの父と母を敬いなさい。(出 20:12)

第六戒：殺してはならない。(出 20:13)

第七戒：姦淫してはならない。(出 20:14)

第八戒：盗んではならない。(出 20:15)

第九戒：隣人について偽りの証言をしてはならない。(出 20:16)

今日の第十戒は、「貪り」がこれらすべての戒めを破る罪へと人を誘うものとなりうることを警告しています。「性癖や思い」というものは、既に私たちの心の中に潜んでいるものであって、「心に入りこませない」ことは困難です。それらを「火種」と考えるなら、火に油を注ぐものを近づけないことが重要でしょう。しかし、何よりも大事なものは、私たちが神と自分と

の関係に集中すること、神の目に自分の思いや行ないがどう映っているかを問い、神を畏れて生きることです。

② 常に心を尽くして罪を憎み、すべての正義に満足を見出し、それを喜ぶべき

ここでは「罪を憎む」ことと「正義に満足を見出す」ことが強調されています。「**貪欲は偶像礼拝にほかなりません**」(コロサイ 3:5) とパウロが語っているように、貪欲すなわち「もっと持ちたい欲望」は神と人との間に「憎しみに満たされた溝」(ペリー) をもたらします。神の側に立ってみるならば、「わたしが与えたものが不満なのかね？」という気持ちになるのでしょうか。むしろ、神が与え給うたものに磨きをかけ、豊かに活用し、誰かの役に立てていくことが、地上でそれを手にした人の責任ではないでしょうか。決して「人のもの」に手を出すのではなく、今あるものを大切に用いていくことが「**満足を見出す**」ということだと思われま